

全国銀行従業員組合連合会（銀行労働研究会）発行

復刻版

ひろば

全10巻・付録1・別冊1

体裁—B5判・上製・総約4、800頁

収録—第1号〜第300号（1951年〜1964年）

刊行—2018年6月〜2019年5月（全4回配本）

解説—鈴木貴宇（東邦大学准教授）

推薦—志賀寛子・遠藤公嗣・熊沢誠・水溜真由美

揃定価—本体250、000円＋税

敗戦後の日本社会における様々な民主化運動において、労働運動の昂揚はめざましいものがあった。

その中でも、銀行の労働組合を横断的に結集する組織として発足した全国銀行従業員組合連合会（全銀連）は、戦前には展開され得なかったホワイトカラー層の労働運動を代表するものである。

特に、全銀連・青婦人対策部から発刊された『ひろば』は、金融問題にとどまらない幅広い編集をめざし、労働組合文化活動の様態を凝縮した存在となった。



ときには誌上論争も

志賀寛子（『ひろば』元編集長）

『ひろば』は、一九五〇年一月に銀行労働組合の上部組織である全銀連（全国銀行従業員組合連合会）青婦人対策部から発刊された。B5判三〇ページたらずの小冊子であったが、身近な問題を平易な言葉で語っていて親しみやすいと好評で、有料購読制をとっていたにもかかわらず、全銀連解散時（註）の発行部数は六千部を数えた。

『ひろば』は、銀行に働く若い仲間たちの交流の場、意見交換の場であった。投稿記事が論争に発展したものもあった。

例えば、女性たちが日頃から抱いていた疑問・不満に端を発した、早出・お茶汲み、論争。また共働きのありのままを綴った、手記・共稼ぎ私たちの場合。東北のある銀行に働く女性が、現実と理想のはざまで悩む心のうちを切々と綴った手記「現実を追いつめられた嘆きの妻」には、読者から激励やアドバイスが多数寄せられた。

サラリーマンの生き方、生き甲斐をめぐる論争もあった。一回目は一九五八年の鶴見俊輔氏（当時東京工業大学助教授）の講演『中間文化』の時代における中間層の生き方」をめぐる交わされたもの。二回目は一九六六年、加藤尚文氏（評論家）の著書『社会主義的サラリーマン』（カッパブックス）をめぐる、著者をまじえて交わされたもの。この二つの論争をふまえ、五〇〇号記念号（一九七二年）は、「情報化時代のサラリーマン―その生き方をめぐって―」と題し、座談会を行っている。

ところで、この度の『ひろば』復刻出版は、上記「手記・共稼ぎ私たちの場合」に目を止めて下さった鈴木貴宇先生のご尽力により実現したもので、まことに有難く心から感謝申し上げます。

（註）全銀連は一九五六年七月に分裂・解散。『ひろば』『全銀連調査時報』『銀行員の詩集』などの出版物は、解散直後に設立された銀行労働研究会が編集・発行を受け継いだ。

『ひろば』のユニークさ

遠藤公嗣（明治大学教授）

復刻版の原稿にざっと目を通して、思わず記事に読みふけた。そして、当時、『ひろば』がなぜ広く支持され、発行部数がわずか六年間で、一九五〇年の初号百部から全銀連解散直前の六千部に増加したかが、わかった気がした。全国の各銀行の様々な職場の実情や、職場で働く女性労働者の生の声を示す記事が実に多いのである。女性労働者からみた一九五〇―六〇年代の銀行労働と労働運動とは何だったのかがよくわかる。また、全銀連は企業別労組の連合団体であり、他と同様に、加盟する各労組間の隔たりが大きかったが、その克服に『ひろば』が大きな役割を果たしたこともよくわかる。だから、全銀連解散にもかかわらず、また購読料値上げにもかかわらず、発行者を全銀連から銀行労働研究会にかえて、発行の継続が支持されたのだと私は思う。連合団体解散にもかかわらず発行が継続された組合機関誌を、私は『ひろば』以外に知らない。皆無かもしれない。『ひろば』はそれだけの価値があったのである。戦後労働運動というと男性労働者のそれのみを無意識に思い浮かべる視野の狭さが、いまなお日本の労働運動家と研究者の遅れた実情だろうが、それを打破する一助になることを、私は『ひろば』復刻版に期待する。

『ひろば』復刻に寄せて

熊沢 誠（甲南大学名誉教授）

私はかつて、一九五五年に当時の富士銀行に入社し七八年に事故死した真摯な一銀行員の職場生活の軌跡を辿ったことがある（『新編日本労働者像』所収）。その人、河部友美は、きびしいノルマを課せられる有能な貸付係でありながら不屈の反主流派の組合活動家であり、同時に終生の反体制思想の探求者でありながらいつまでも「文学青年」であった。それらいずれのありようも放棄しないゆえの心労を背負う、それは短い苦闘の生涯だった。

その河部が愛読し続けたのが『ひろば』である。河部（筆名・上野典明）はときおりこの『ひろば』に、「中間層」とみなされるもする銀行労働者に必要な立ち位置（一六七号）、仕事上の専門性の陶冶と銀行の政策に対する発言力との関係（五〇〇号）、労働現場にありつつしんどくてもそこに執着してそこを変えようとする労働組合のあり方（六〇〇号）などについて論陣を張っている。河部の眼を通しての理解かもしれないが、どう論じても矛盾を免れない、単眼的な解の難しいこうした課題にも立ち入るところに、労働組合の公式政策の表明、革新側の啓蒙的な講演記録、銀行員なかまのリアルな職場情報の交換などに留まらない、『ひろば』の質の高さがうかがわれる。『ひろば』は、銀行員という独自の労働者階層、銀行の支店という特徴ある職場が培った文化を示す歴史的な資料なのだ。戦後労働運動の一隅から生まれたこのユニークな刊行物がいま復刻される意義は大きい。

サークル運動を知る貴重な資料として

水溜真由美（北海道大学准教授）

近年、一九五〇年代に各地で発行されていたサークル誌が続々と復刻されている。全銀連青婦人部の機関誌としてスタートした『ひろば』の復刻も、その流れの中に位置づけることができる。今日の感覚からすると、銀行員はどろくさい労働運動のイメージとは結びつきにくい、五〇年代から六〇年代前半にかけての『ひろば』の誌面の傾向は、炭労、国労を始めとする同時代の労働組合の機関誌や職場サークル誌と共通している。

ただし、『ひろば』においてユニークなのは、労働の場での女性問題―産休育休、賃金格差、結婚・妊娠後の退職慣行（強要）、早出掃除、お茶くみ等―を頻繁に取り上げていることだ。これらの問題をめぐってすくい上げられた女子行員の声は、同時代の女子労働者が書いた生活記録に通じている。

ところで、全銀連のサークル運動と言えば、石垣りんを世に出した『銀行員の詩集』が有名である。組合員から作品を広く募り一九五一年から年刊で発行されていた『銀行員の詩集』の存在は、『ひろば』においても圧倒的だ。

『ひろば』は、サークル運動の盛衰の過程を知るための第一級の資料でもある。『ひろば』の復刻を通じて、五〇年代におけるサークル運動の全体像がいつそう明らかになることを期待する。

鳥取県で、最近給与体系の問題にからんで男女別給の婦人の職制などが問題になつてまいりますが、たまたま鳥取県庁長の主観で旧体系の婦人職制が問われた際、部長が「女は仕事ができるより品でなければいけない。女らしさが欠けてい」というようなことを言つたことから五月十八日に本組合をたたいと思ひます。

アクセサリーではない

五月十八日の経営者会議では「女らしさ」についてのいろいろな疑問や、どうしたら女らしくなることができるかと個人自身の問題が提起された。「女である以上女らしさを保持するのは当然であることはどういふことだろうか。週末の仕事がなければ自然身近のことにかまっていられない。女、酒席からしていわゆる女らしいだと思います。社会の秩序に合致した新しい道徳が、実現が必要ですが、それは私たちが手で創り出す必要はないと思います。もつと与えられるよりも働きかけを重視したいものです。現在の私たちは真向からこういう問題に対して反駁することを避

「**ノ** 背崩しの人で、給與統制を
「**ガ** 職場にしるびこむ破防法
「**一** をはねかえそう
生活に根を張つて文化活動を起こす破防法支持者をおくるな

青婦人の力で給與被制を
打破ろう
職場にしびこむ破防法
をはねかえそう
結ぶ手と手で組織を守ろ
う

生活に根を張った明るい文化活動を起そう
 被防法支持者を再び国会におくろな
 戦争に反対し平和憲法を守ろう

▲ 第39・40号 (1952年8月)

私たちの闘い



▲ 第25·26合併号 (1952年1月)

—その発生とうつりかわり—

おいたちから運命づけられに補助的主客としてはいふ人達を助けてあげてあげたようである。

わが國では、はじめて女子事務員を採用したのは三井銀行大阪支店であつた。「良家の子女は人前に立つような格好へ出るべきではない」とつた旧式な考え方が支配的であつた明治二十七年のことである。当時の支店長の回顧録によると、まず、小學校卒業以上の学力がある者、八名を試験的に採用し、約三ヵ月ばかりソロバンや札勘を練習させたところが、その成績は案外よく、札勘を男子とに正確で敵であつたのが、通格的に採用することにしたという。ところが、その後、男子の中に、女子の髪のおいが鼻について困る」といふような苦情をいふものが出て来たが、彼は「店員全部を揃めて欧米諸國の風情を覗き、日本において一國家經濟の地見より、大いに女子業の発達をはからなければならない」と教えさとし、女子の採用を断行したという。当時

次大戦にかけて、百貨店、官庁、一般会社などで女子事務員を採用するところがふよびつた。日本資本主義が飛躍的に発展し、金融の規模が拡大するにつれて、事務活動の分化は、補助役員として、大量のサリー・ガールを登壇させることになつたのである。たとへば、今日の東京の商會である芝浦製菓所では、大正五年にはじめて女子事務員を採用したが、その時の模様を、同社の社長は次のように述べている。「これより先、丸の内沿の商會会社や呉店等であつたに違ひない。『女校生を事務員に採用し始め、むしろ優良な仕事は、女子の方が都合よい事が判り、いよいよ計数事も採用し、初めは、主に計数事務を取扱はせられた。』つまり、サリー・ガールは、その生い立ちの最初から、『補助事務員として、仕事の上では、給手の上も、二重の差別待遇を余儀なくされたのである。大正末期に内務省で内務がおこな

支給枚数：一箱（カテゴリー別）
支給年：月日：昭和二十五年四月
着用期限：一、二年
品質：化繊ギザバ
色：紺
値段：七〇〇円
クリーニング代：個人負担
その他の条件：着用年限をすぎたものは自動的に個人所有となります。

ます。

× ×

はじめに要求したときは、組合の婦人部でとりあへ、デザインも婦人部の中から募集してきめたものです。いまでも更新制のためごとに布地の測定は予算の範囲内で婦人部の役員に相談できまら

ています。したがって、結構ならしめてあります。しかも、一つつと上質の組合員のあいだは「もつと上質の布造を」という要求があります。

〔評〕 最近婦人の服装はかきでなく男子の服装もやわらかがでてきていますのに、この事務服は捨にしてもポケット、ヨークの切りかえすべて直線と非常にかたい感じがうけます。袖もとに下の洋服が見え出し、袖もとに下の洋服がすつきりいたしますが、冬事務服の場合はどうしてもセーター等が出ますからあまり感心できません。上質生地を要求と同時に、もう少しデザインを考へてはどうでしょう。

事務服のファッション

▲ 第116号 (1956年3月)

▲ 第161号 (1958年3月)

▲ 第91号 (1955年1月)

ともしびサークル

心とけあう楽しいサークル
はじめ組の機関紙等に時々劇
作を発表していた人たちが、青
いサークルである。

数のものが簡単に頭論だてた「サ
ータル論」などで、複雑な人間性
を追求しようとする文学者層をひ
ろく包摂してゆくことは出来な
かった。もちろんサータルのある
べき方向、組合運動をおしすすめ
てゆく上にサータルがもたらした
役割を果すが、また果すべきは
よくわかつていた。

このサータルが出来る二年ばか
り前、詩の同好会が発行「ドニエ
ブル」という詩誌が生まれ、その
があらわに、オースラだけであ
りませんでした。

よびかは、極めて素朴人のひと
りよがりの感じの強いものであつ
た。そこに集つた詩は、そのほと
んどがすすめ、すすめ、このス

だが初めからある一定の方向をもつてつづけたようなサテラルは決して育たないだろう。組合の御用サテラル——私たちはそんなサテラルにたくなかった。職場のすべての人びとに愛され、親しまれる「ともしび」ということを

ローガンのもとに、それだけに一部ののびだけにしか通じあうことのできない作品ばかりだったように思う。その作品は少いが遂に出なかつた。その私はもうと残念に思わなかつたし、職場の人々も全く気



構成 小田切秀雄

空想家とシナリオ

西田 勝

鉄錠と超い役所の顔で現れながら、戸籍官にパスを渡しながら、戸籍官が持っているのを一瞥も聞かなく機械的に新しい紙に転写し、戸籍簿本、抑木、身分証明書などを作成しているあれである。私用の電話ひとつに出で、くことさな上夜の間をうかがわなければならないず、また、上夜のさげない一言にさえも飛び上らんばりの姿勢で応じていかなければならない下宿みの國史の一人なのである。

朝六はすでに三〇分あるから、単に着いたとはいへぬ、もちろん顔着ではない。小田急沿線の郊外にある善六の家には、善六に給料においては五〇円（駐廻和一年）といはいえぬ金額であった）。ほどの才覚があればいいから、ほんと

ふたつの円周

[illegible]

「銀行員の詩集第三年度版」は、一月土曜日出版されることになり、いま書と完成を急いでいます。詩歌雑誌ばかりでなく、そのほかの文芸界でも、一日早く詩集を手に入れるのが待たれどんでん返しに思われるべきです。山田先生はこれと結構な面合ひのある苦心を重ねておられ、編輯部の方に、いままでの経過をおかしてみした

一部の読れた詩人がいても、その他の會員たちはまだ行く勢に欠けいるので、今気づけたものと、この点、実情ではお断りしたい。また、同書では戦時中や戦後で執筆されたもの、詩の作に於ける新しさという、両生草の如きもので、私たちの存意も、

☆愛心した詩の取捨選択
讀びのあつち、編集に入つ

1952年版
野間宏撰



のですが、採点された中からどれを採用してゆくかは予想外に困難なものでした。なるべくひろく、段

銀行員の詩集
1952年版
野間 宏 選
伊藤 信吉 送

北海道拓殖銀行

青森銀行	日本勸業銀行
岩手殖産銀行	農林中央金庫
秋田銀行	富士銀行
七十七銀行	三井銀行
莊内銀行	三菱銀行
埼玉銀行	横浜銀行
千葉銀行	第四銀行
協和銀行	北陸銀行
商工組合中央金庫	山梨中央銀行
第一銀行	八十二銀行
東京銀行	静岡銀行
日本銀行	東海銀行
	三和銀行
	住友銀行
	大和銀行
	神戶銀行
	紀陽銀行
	山陰合同銀行
	広島銀行
	伊予銀行
	福岡銀行
	大分銀行
	佐賀銀行
	十八銀行

▲ 第60号 (1953年6月)

① 午 前 全5巻・別冊1

南風書房 発行／北川晃二編／一九四六年～一九四九年刊
 体 裁 A5判・上製・総2,104頁
 別 冊 解説・回想・総目次・索引
 解説 狩野啓子・長野秀樹・深野治
 解 題 90,000円＋税
 推 薦 大西巨人・紅野敏郎

② 文化展望 全3巻・別冊1

三帆書房 発行／大西巨人ほか編
 一九四六年～一九四八年刊
 体 裁 B4判並製・B5判上製・総666頁
 別 冊 解説・総目次・索引
 解説 赤塚正幸・大西巨人・狩野啓子
 解 題 28,000円＋税
 推 薦 大西巨人・紅野敏郎

③ 鵬・ピオネ・藝術前衛 全2巻・別冊1

鵬同人社ほか 発行／岡田芳彦・出海溪也ほか編
 一九四五年～一九五〇年刊
 体 裁 菊判・上製・総886頁
 別 冊 解説・総目次・索引
 解説 赤塚正幸・麻生久・出海溪也
 解 題 35,000円＋税
 推 薦 大西巨人・紅野敏郎

④ サークル村 全3巻・付録1・別冊1

九州サークル研究会 発行／一九五八年～一九六一年刊
 体 裁 A5判・B5判・上製・総1,904頁
 別 冊 解説・回想・総目次・索引
 解説 井上洋子・坂口博・松下博文
 解 題 65,000円＋税
 推 薦 有馬学・池田浩士・上野千鶴子・鶴見俊輔

⑤ 人民戦線 全5巻・別冊1

人民戦線社 発行／中西伊之助編
 一九四五年～一九四九年刊
 体 裁 A5判・上製・総1,700頁
 別 冊 解説・総目次・索引
 解 題 68,000円＋税
 推 薦 高柳俊男・西田勝

⑥ デンダレ・カリオン 全3巻・別冊1

大阪朝鮮詩人集団機関誌／一九五三年～一九六三年刊
 体 裁 A5判・上製・総922頁
 別 冊 解説・鼎談・総目次・索引
 解 題 宇野田尚哉・細見和之
 推 薦 36,000円＋税
 金時鐘・梁石日・鶴飼哲・米谷匡史

⑦ 東京南部サークル雑誌集成 全3巻・付録1・別冊1

一九五一年～一九六〇年刊
 体 裁 B5判・上製・総1,864頁
 別 冊 解説・解題・回想・総目次・索引
 解 題 道場親信／解 題 浜賀知彦
 推 薦 68,000円＋税
 小関智弘・坪井秀人・西川祐子・ハリ！ハルトウニア

⑧ 総合文化 全3巻・別冊1

真善美社 発行／一九四七年～一九四九年刊
 体 裁 A5判・上製・総1,318頁
 別 冊 解説・総目次・索引
 解 題 鳥羽耕史
 推 薦 48,000円＋税
 池田浩士・高良留美子・鶴見俊輔・成田龍一

⑨ 新女性 全16巻・別冊1

新女性社 発行／一九五〇年～一九五六年刊
 体 裁 A5判・上製・総9,496頁
 別 冊 解説・総目次・索引＋DVD1枚
 解 題 伊藤康子
 推 薦 370,000円＋税
 犬丸義一・坪井秀人・橋本宏子・藤目ゆき

⑩ 人民文学 全15巻・付録1・別冊1

人民文学社 発行／一九五〇年～一九五五年刊
 体 裁 A5判・上製・総6,750頁
 別 冊 解説・解題・回想・総目次・索引＋DVD1枚
 解 題 道場親信・鳥羽耕史／回 想 柴崎公三郎
 推 薦 256,000円＋税
 加納実紀代・島村輝・坪井秀人・成田龍一

⑪ 学園評論 全9巻・付録1・別冊1

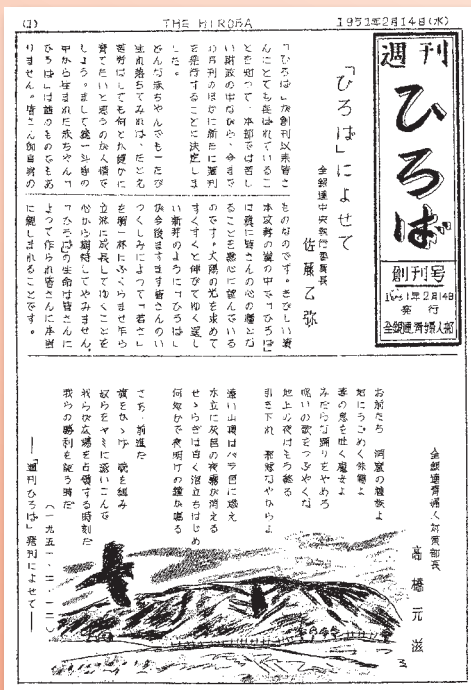
学園評論社 発行／一九五二年～一九五六年刊
 体 裁 A5判・上製・総4,230頁
 別 冊 解説・総目次・索引
 解 題 中西直樹
 推 薦 170,000円＋税
 宇野田尚哉・西山伸

⑫ 琉大文学 全5巻・付録1・別冊1

琉球大学文芸部（琉大文藝クラブ） 発行
 一九五三年～一九七八年刊
 体 裁 A5判・上製・総2,556頁
 別 冊 解説・総目次・索引
 解 題 我部聖
 推 薦 96,000円＋税
 小森陽一・新城郁夫・仲程昌徳・目取真俊

⑬ 東北文学 全8巻・別冊1

河北新報社 発行／一九四六年～一九五〇年刊
 体 裁 A5判・上製・総4,134頁
 別 冊 解説・総目次・索引
 解 題 高橋秀太郎
 推 薦 145,000円＋税
 安藤宏・石川巧・澤正宏・山田有策



ひろば

復刻版
全10巻・付録1・別冊1

●関連図書のご案内

長谷川国雄主宰（昭和3年～昭和11年刊）

サラリーマン

復刻版
全24巻・別冊1

B5判・上製・総9、690頁

揃定価 本体435、000円＋税

発行 全国銀行従業員組合連合会（124号以降 銀行労働研究会）

体裁 B5判・上製・総約4、800頁

収録 第1号～第300号（1951年～1964年）

付録『月刊ひろば』、『ひろば』（313号、500号、1096号等）

別冊 解説・総目次・索引

（分売価格 本体2、000円＋税 ISBN978-4-8350-8249-3）

解説 鈴木貴宇（東邦大学准教授）

推薦 志賀寛子・遠藤公嗣・熊沢誠・水溜真由美

揃定価 本体250、000円＋税

本誌は、一九二〇年代末、昭和金融恐慌・不況を迎え、急速に増大したサラリーマン（俸給生活者）層にとつての受難の時代に創刊された「大衆経済雑誌」である。「新中間層」と呼ばれた彼らを「知識労働者」あるいはインテリゲンチヤーとして自覚させ啓発することを意図した。財閥や企業を撃ち、国際問題を論じ、「サラリーマンは戦争に行きたくない」と非戦論を謳い、「働く者本位の社会」をめざした本誌は、経済史・思想史研究に必須の資料である。

表示価格はすべて税別

第4回 配本			第3回 配本			第2回 配本			第1回 配本		配本																	
付録（月刊ひろば [※] ） 『ひろば』第313号、500号、 1096号（終刊号）等）	第10巻	第279号〜第300号	第9巻	第254号〜第278号	第8巻	第229号〜第253号	第7巻	第204号〜第228号	第6巻	第177号〜第203号	別冊（解説・総目次・索引）	第5巻	第151号〜第176号	第4巻	第123号〜第150号	第3巻	第98号〜第122号	第2巻	第63号〜第97号	第1巻	第1号〜第62号	復刻版巻数	原本号数	原本発行年月	刊行・ISBN （頭に「978-4-」が入ります）	価格		

※『月刊ひろば』は『ひろば』に先行して1950年11月に創刊。その後『ひろば』に統合された。

不二出版

〒112-0005
東京都文京区水道2-10-10
TEL 03-5981-6704
FAX 03-5981-6705
振替 001600294084